

〈序論〉 実心実学とは何か、その視点……………小川晴久

はじめに

二十一世紀に入りました。しかしその幕開けはアルカイダによるニューヨークセンタービル爆破事件（二〇〇一年九月十一日）とそれに続くアフガニスタン戦争、イラク戦争で、人類は「戦争の世紀」（二〇世紀）をまだ克服できていません。二〇世紀の東西対立で抑え込まれていた民族の自立や宗教の自己主張がその崩壊と共に本格的に始まったと言え、この事態は必然と言うべきかもしれません。直接火を噴いてはいませんが、東アジアも北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の核を武器とする軍事路線、全体主義体制のため、戦争放棄を誓った憲法第九条改正の動きが加速されています。

地球環境の悪化、温暖化による太平洋諸島沈没の危機など、民族や宗教の対立に熱中し、戦争などしている暇や余裕はないにもかかわらず、人類は目先の問題に目を奪われ、尊い人命と文化遺産を破壊しています。

また最近では幼児殺しや父母殺しなど異常な殺人が増えています。かつては常識であったもの、モラルが通用しなくなっていく危機感を覚えます。学問・教育分野でも、基本的なことがら、基礎的なものの習得が容易でなくなっています。

これらの国内外の否定的な事態や現象は近代の成熟が生み出したものであるといつてよいでし

よう。私たちは今こそ近代化がもたらしたプラス面とマイナス面をしっかりと捉え、後者を克服していくべきでしょう。混乱していると見える現代に、二十一世紀の課題を解決するためにも、またできるだけ明るく現代を生きるためにも、私たちは近代以前の先人の営みに目を巡らすべき時期にきています。遅きに失したと言われるかもしれませんが、ウォーミングアップを十分に積んだと見ることもできます。

私たちがこれから読者の皆さんにご紹介しますのは、江戸時代の思想（家）です。それを従来の、「封建時代の思想」とか「近代を準備した思想」という視点ではなく、江戸時代を実心（真実の心）をもった実学（学問、思想）、真実の心を大事にした思想を涵養し、それを豊かにもった時代として、その思想―実心実学―を紹介したいのです。十一人の実心実学をとりあげますが、はじめに私たちの視点をもう少し詳しく記して、序論といたします。

一 江戸時代Ⅱ近世を見る目の変遷

戦後六十年目を迎えた今日、私たちは江戸時代（日本的いい方で近世）を見る目が変わりつつあります。

第二次世界大戦で日本が敗北した直後、日本の教科書から江戸時代の思想が消えました。江戸時代の思想（国学と儒教）が天皇制と軍国主義イデオロギー、換言すれば忠君愛国思想に利用さ

れたからでしょう。当時はアメリカから民主主義を学び、封建的思想の一掃につとめていたので、妥当な措置と考えられました。

歴史学の分野では社会経済史を中心に幕藩体制の考察がなされ、社会発展と近代化の視点からの考察が一貫してなされてきました。高度成長期を経て、日本が経済大国になり、経済的に豊かになると、鎖国日本は暗黒な歴史ではなく、江戸時代の文化はきわめて豊かな内容をもっていたという江戸時代の見直しが始まりました。

一つの大きな契機がやってきました。一九八〇年代に入って地球の生態系の危機が叫ばれるようになったのです。この契機は後に述べるように近代以前を見る目を革命的に変えました。とくにアジアの前近代は停滞した時代であり、遅れた時代であったという停滞史観が、持続可能な発展という発展観の変革を介して、生態系の持続性として評価し直されるようになりました。アジアに濃厚であった有機体的自然観もそれまでは工業化を実現した機械論的自然観に比して、遅れたものと評価されていましたが、生態系保持の要請から高い評価を受けるようになりました。

この地球の生態系の危機という契機が江戸時代の思想を見る目を、これまた決定的に変えました。私たちが実心実学という規定でそれをとらえる営みが始まったのです。

二 実心実学とは何か

実学という概念は実用の学、実業の学として、現代社会に完全に定着しています。しかし東アジアの近代以前にはもう一つの異質な実学概念が存在していました。儒学、朱子学を意味する実学です。これは十一世紀に朱子学の自己認識として登場して以来、出世間の仏教や自然に親しむ老荘の学に比して、家族や社会を大事にする儒学こそ、中身のある実学であるとして定着してきました。儒学は修己治人の学であって、己れを修めることを重んじます。また「実」の概念の中には事実や実際の意だけでなく、真実、誠実の意味があります。「誠者天之道也、誠之者人之道也」（『中庸』）の天の道としての誠がそれです。これは天人関係の天に当ります。このように「実」には事実と真実の二つの要素があつたのです。実学もこの二つの意味を帯びるようになります。修己や誠を重んじる実心と治人（人を治める）や日用の学としての実学と。この二つの要素をもつ実学、実心に貫かれた実学が実心実学なのです。

実心実学が儒学の代名詞であることがわかりますと、実心実学は孔子の時代から存在していたこととなります。しかし私たちの関心は十七世紀以降の儒学（実心実学）に向けられます。十六世紀末に中国に入ったイエズス会の宣教師の学問の洗礼を受けた儒教です。つまり大地が球体であり、中国が世界の中心ではない（中華意識の否定）グローバルな地平を獲得した儒学（実心実学）

こそ私たちが関心を向ける実心実学です。それは丁度江戸時代の儒学に当ります。私たちはこうして江戸時代の儒学が実心実学（実心を重んずる実学）であることに気づくのです。

儒学が実学と呼ばれたことを常識として知っていた人は、儒学の実心実学性など当たり前のことと云うでしょう。しかし、私たち以下の世代はそれを常識として知りません。私自身は実心実学との出会いは朝鮮実学との出会いを介してでした。朝鮮の若き知識人たちは今から七・八十年前の一九二〇〜三〇年代に十八世紀後半の英祖、正祖期の学問（儒学）を実学（実事求是の学）として発見し、解放後も、十七世紀から十九世紀中頃までの儒学とくに反朱子学的儒学を実学とよんで精力的な研究を続けてきたのです。近世の儒学を実学と呼んで国家的規模で研究を続けてきたのは、南北朝鮮であり、その意味で南北朝鮮は近世実学研究の先進国でした。停滞史観を克服しようとした彼らの意識（主観）とは別に、研究対象が近世の儒教でしたから、それがもつ実心の側面をも明確にしてくれました。ふり返って江戸時代の儒教や思想を見ると、それらも同じく実心の要素を豊かにもった、実心を重んじた学問であることがわかってきたのです。

源了圓氏はいち早く江戸時代の思想を実学ととらえた日本の先駆者ですが、江戸時代の実学思想を実心を重んじた実学、実証を重んじた実学、実践を重んじた実学の三段階の変遷としてとらえました。私たちの立場は江戸時代の実学をすべて実心実学ととらえ、最後まで実心を重んじる要素、モメントを重視します。例えば渡辺崋山は蘭学を介して西洋の学問を理解しましたが、同時に儒教の仁の思想を大事にし、西洋列強の侵略性を批判しました。福沢諭吉との違いです。

江戸時代の実心実学の中に、実心的実学から近代的実学への展開を見る源氏の分析は妥当性を持ちますが、私たちの立場はあくまでも近世の実学と近代的実学の本質的差異（実心の有無）を重視します。それは現代の学問（実学）に実心を回復させようという志向があるからです。

とは言っても、江戸時代二六〇年の実心実学思想の歴史にも大きな区分があります。実心実学思想の形成期と発展期の段階のちがいです。分岐点は元禄期です。

どちらの時期の実心実学思想も大事ですが、私は形成期の実心実学者の営為に大いに敬意を払いたいと思います。

形成期の実心実学者として中江藤樹、伊藤仁斎、貝原益軒らを指摘したいのですが、彼らに共通しているのは本当に儒教をよく勉強し、自分の問題を持つて格闘し、儒教を自家薬籠中のものにしていくことです。それゆえに儒教のよさをわかりやすく、説き明かしています。

実心実学の本質または根本的条件は、儒学の本質をしつかりとつかみ、自分の言葉とし、それを実践していることです。横井小楠のいう「合点」的認識までいって、始めて実行が可能となるからです。この要件は陽明学という知行合一と言ってもよいでしょう。ならば実心実学は陽明学のことと言えることになりませんが、先述したようにイエズス会宣教師文化の先例を受けていなければなりません。グローバルな地平が不可欠なのです。

実心実学（思想）とは、真実を何よりも重んじ、儒教の良さを引き出し、活かし、知識人としての社会的責任を果たそうとする学と言ひ換えることができます。実心とは端的に言つて仁（他

者への思いやりと愛)の心とその実践と言つてよいでしょう。本書にとりあげた十一人の実心実学者は学者としての誠実さをもち、それを發揮した実心実学者たちでした。

三 近世を見る二つの視点(近代の二つの反省)

世界に開かれた実心実学のうち、なぜ実心の要素をとことん重視するかと言えば、近代に対する二つの深い反省があるからです。ここにいう近代は現代までを含みます。

〈地球疎外的科学批判〉

近代に対する反省は欧米では十九世紀中頃から始まっています(ゲーテ、ヘンリー・ソー、トルストイ、ガンジーほか)。産業革命によつてヨーロッパを中心に都市化、都市の大気汚染、自然破壊が始まったとき、鋭い感覚をもつた知識人たちは、いち早くそれを警告したのでした。しかし封建的身分制の打破と西欧の科学、技術をやつと手に入れたばかりのアジア、とりわけ日本は、西欧近代の、とくに科学、技術のもたらす破壊性(生態系の破壊)について、全く気づいていませんでした(カール・レーヴィット『ヨーロッパのニヒリズム』筑摩書房)。

二〇世紀の後半、一九八〇年代に入つて、鈍感ながら私たち(アジア)も、近代科学と技術が地球の生態系を破壊するところまできて、このまま開発の道をつき進むと、人類や生物の生存基

盤そのものが破壊されてしまうことに気づき、漸くその恐ろしさに気づくに至りました。ゴミ処理問題から江戸時代の循環型社会の循環性が注目されるようになりました。

発展史観が見直され、持続の価値、循環の価値が評価されるようになりますと、長い間東洋（アジア）は、停滞社会、持続の王国として、遅れた社会と見なされてきましたが、今やこの停滞、持続こそ価値であると思直されるようになったのです。地球の生態系の維持、保存にとつて停滞、持続こそは価値なのです。しかし、停滞や持続、循環の評価も、近代が切り開かれて以後のそれであることに注意する必要があります。持続や停滞を評価するといつても、近代以前の身分社会に戻ることを私たちは望んではないからです。

近代への反省が深まるにつれて、ついにその核心がつかまれました。ハンナ・アレントが『人間の条件』という大著のなかで、近代科学（現代科学）の「地球疎外」性を抉剔けつてきしたのです。

近代は実験と近代代数学の結合によって巨大なもの（たとえば地球、惑星間の距離）を肉眼に見易いほどに縮小する方法を獲得しました（地球儀を見よ）。

地球は本来とつともなくでかいのに、それを地球儀に縮めてしまった人類は地球の大きさがわからなくなり、距離や形に対する感覚を失ってしまいました。そのことをアレントは地球疎外と言います。等身大的認識の破壊といつてもよいでしょう。人類は宇宙の力（エネルギー）を地球に引き入れようとしていて地球の生態系や地球上の生命を破壊しようとしていると、彼女は重大な警告を發しました。ここに至つて私たちは近代以前の科学や学問の「等身大的認識」を再發見、

再評価し、その等身大性を回復しなければならぬことに気づきます。地球の生態系を守るためです。

〈貨幣経済批判〉

近代を反省する今一つの志向は、貨幣経済の評価の見直しです。

既成の社会主義が失敗し、かつての社会主義圏が、市場経済、貨幣経済に席捲されつつあります。そのためでしょうか、現代社会はお金の支配の下にますますその隷属を深めています。

一九九五年に他界した『モモ』の作者ミヒヤエル・エンデはとても重要な遺言を残しました。お金を本来の役割にひき戻そう、利息のかわらないお金は創造可能なのだ。エンデが依拠したシルビオ・ゲゼルは一九一六年に『自然的経済秩序』という大著を著わし、自由貨幣（いわゆる今日の地域通貨もその一種）の理論と実践を提起していました。

ゲゼルは十九世紀のブルードンや十八世紀初頭のボアギユベールの系譜上にいます（森野栄一氏談）。『エンデの遺言』によって気づかされ、促されたのは、貨幣経済の発達を社会発展の尺度としてきたその尺度の見直しです。

現代社会が貨幣経済の下に苦しみ、その支配から脱却する道を再度今必死に求めているとすれば、かつて貨幣経済の浸透に反対した人々の営みは再評価されてしかるべきではないでしょうか。少くとも貨幣経済の発達を社会発展の尺度とする史観を捨ててみるべきではないでしょうか。こ

うしてみると貨幣經濟の未發達を根柢に朝鮮を低滯した社会とみた従来の見方は否定されなければなりません。朝鮮の近世（十七世紀～十九世紀）には沢山の「契」の制度がつくられ、發達していたと言われます。これは貨幣經濟の浸透に対する人類の知恵（朝鮮社会の知恵）の發露と見ることが可能です。

江戸時代の日本にも存在した「講」制度も貨幣經濟への對抗措置として新しい評価を与えられてよいのではないだろうか。こういう視点に立つとき、戦国時代から徳川期にかけて日本は貨幣の材料、鑄造技術、貨幣の流通版図の三拍子を揃える世界的にも稀な国であったことを誇る（西尾幹二著『國民の歴史』）のは、事実認識としてはある意味を持ちますが、世界に向ってそれを誇ることは、今や古い發想であることがわかつてきています。

以上、私たちは江戸時代を、近代を是としていち早く近代化を志向した時代という見方を捨て、科学、技術の發達を必ずしもそれだけでは是とせず（觀察の大切さという意味で等身大的認識を評価し）、また貨幣經濟の發達を是とするような態度は尚更とらずに、見直してみたいのです。すると貝原益軒、宮崎安貞、熊沢蕃山、石田梅岩、安藤昌益、三浦梅園、山片蟠桃、大蔵永常、二宮尊徳、渡辺崋山、横井小楠らの思想家たちがそれぞれとも魅力ある思想家として浮び上ってきます。

これらの思想家群を私たちは江戸時代の実心実学者と名づけます。

以下の各人物論で、そのどこに私たちが引かれるか、明らかにされますが、上述した現代の病

理（生態系の破壊にまで及ぶ科学・技術信仰と欲望の肥大化、貨幣の崇拜とそれへの隷属、哲学の貧困）を克服せんとする姿勢に立つとき、これらの人物はその一人一人が私たちの心をつかむのです。

江戸時代にはこんな魅力的な思想家が、こんなにも沢山いたのかという思いが、本書を編んだ私たちの素直な感想です。今回は十一人ですが、第二弾、第三弾と紹介していきます。まず個々の人物に触れていただきたい。そしてそれを通して実心実学の何たるかをつかんでももらえれば幸いです。これらの学者たちは二十一世紀の日本と世界を生きる者の師表です。

四 新渡戸の『武士道』概念に代えて

最近、新渡戸稲造の『武士道』が再び読まれています。日本の武士道が道徳価値意識の面で孔子や孟子の思想の影響を大きく受けているという指摘には、啓発されました。日本人が引き継ぐべき人間らしい精神として新渡戸の武士道には魅力を感じましたが、ネーミングとしては、女性が受け継ぎにくいものを持っています。実心実学は儒教を土台にしては、儒教の価値観の尊女卑のイデオロギーではないかと言う反論があるでしょう。それに対しては、儒教の価値観の根幹をなし、実心実学の実心の重要な要素である仁―相手への思いやり―は女性原理であると私は考えています（『南の認識と性善説』拙著『南の発見と自立』所収）。又十七世紀以降の実心実学の実心は陽明学の影響を大きく受けています。陽明学（特に李卓吾を代表）には女性観の大きな

変革が見られます。ならば、武士道に代えて江戸時代の「実心実学」を二十一世紀の私たちが受け継ぐべき日本人の精神として提唱する意味が大いにあるのではないかとの感を深くします。武士道と言う概念よりは実心実学の方が、女性を含め、広く人間のまなこ（眼）で江戸時代の遺産に向うことができますから。